

## 上野先生、ありがとう

佐藤史郎

私が本学の専任講師として赴任して2年目の頃だったであろうか、上野先生から旺文社の実用英語検定試験の面接委員をやらないかと誘われ、二つ返事でお引き受けした。私の専門が英語教育の中のテストイングということもあり、いわゆる能力テストの代表格ともいえる「英検」の本当の姿を知りたいという動機もあった。しかし、その時点から遡ること14～15年前に自分が「英検」の受験生として置かれていた立場を返上して、今度は試験官になれるんだというある種の誇らしい気持ちの方が勝っていたのかもしれない。

この「英検」は藤沢地区にあるいくつかの高校で実施された。「英検」の級によって面接に要する時間が異なるが10分足らずの時間で2次試験の合否が決まってしまうこともあって、受験生の緊張ぶりが手に取るように伝わった。それだけに手抜きは許されなかった。午前と午後で担当する面接試験の級は異なるものの、合計40人前後の受験生を面接しただろうか。すべて終るとさすがに疲労感はあるものの、何とも言えない成就感と解放感で満たされたものだ。私が接した数多くの受験生の中にはユニークな人もいた。

ある日、かなり緊張した面持ちの男子高校生が入室してきた。「どうぞお座り下さい」と英語で言うと、この高校生はなんと椅子の上でなく机の上に座ってしまった。この受験生は残念ながら不合格であった。また、幼い頃ニューヨークに長く住んでいたという女子高校生は試験問題の英文をほとんどネイティブ並みに音読した。こういう場合は、英語の質問に対する応答が完璧に近いことが多いのだが、案に相違して私の質問に満足に答えられたのはほぼ皆無に近かった。発音が面接官の私よりはるかにうまかったので、少し、ホッとした気持ちになったのも事実だ。英文のパラグラフを音読した後に、英文を見ながら面接官の質問に答えるという出題形式は、話す能力を測るテストとしての妥当性を欠くのではないかとの疑問を長い間抱いていたが、現在は4コマの漫画をテストに取り入れるなどして、テストそのものは大幅に改善されている。

「英検」が終って、小田急線の「長後」という駅で大学時代の友人と待ち合わせ、喫茶店で学生時代の思い出話しに花を咲かせることができたことも今では懐かしく思い出される。ともあれ、貴重な経験のチャンスを与えていただいた先生には今も感謝している。

大学では、新しい研究棟に移るまでの暫くの間上野先生の研究室に居候させて戴いたことがある。先生はいつも笑顔を絶やさず、弱輩者の私におおらかに接して下さったことも忘れられない思い出である。また、飯島周先生が学長をされているときは、上野先生が副学長をされ、私も図書館長として執行部の一員として御一緒に働かせて戴いた。執行部の会議で難題がもち上がっても、上野先生のひと言で丸く収まった案件も少なくない。

長い間御一緒させて戴き感謝の気持ちで一杯である。退官後は、あらゆる意味の自由を満喫され、人生をフルにエンジョイされることを心から願う次第である。